

田柄川流域開発史

井上孝夫

千葉大学教育学部

The History of Development of Tagaragawa Watershed

INOUE Takao

Chiba University, Faculty of Education

田柄川は東京都練馬区の北東部を流れる小河川であったが、現在は暗渠化されてグリーンベルト（田柄川緑道）となり、その姿を消している。ここでは、江戸時代以降、田柄川とその流域がどのように変化したかを跡づけ、河川環境の悪化を考えるための基礎的な資料を提示する。

キーワード：田柄用水（Tagara Irrigation Canal） 成増飛行場（Narimasu Air Force Airport）
都市化（Urbanization） 下水道（Trunk Sewer）

1. はじめに

田柄川は東京都練馬区の北東部を東に流れ、板橋区の都立城北中央公園の先で石神井川に合流する全長5キロ弱の小河川であった。流域にはかつて農耕地が広がっていたが、太平洋戦争後、とりわけ1960年代になると急速に宅地化がすすんだ。そしてそれに伴って、生活排水が流入し、水質汚濁のすすんだ典型的な都市河川の一つとなった。そのため、1970年代に入ると下水道幹線に転用され、暗渠となって、そのうへは「田柄川緑道」というグリーンベルトに変わった。

現在、地図上から田柄川は消えた。だがかつて川が流れていたことを示す痕跡は至る所に残っている。ここでは、それらを手がかりに、田柄川流域の開発史を追跡してみることにしたい。

なお、本稿は都会の川はなぜ汚れたのか、という研究課題の一環をなすものであるが、ここではその分析のための基礎資料として、田柄川流域の開発に焦点を合わせて、主として事実関係と歴史的経過の記述に絞っている。

2. 一枚の絵地図から

江戸時代に描かれた一枚の絵地図が残されている。寛政4年（1792年）に筆写されたもので、「下練馬村絵図」といわれている^①。[図1]は、山之内編（2008）によるその翻案図である。

田柄川の流れる現在の練馬区北町・錦のあたり（図の上半分）をみておこう。

西側、南北に延びるのは目白通り、あるいは高田道と呼ばれる道路で、田柄と北町の境界線である。この道をそのまま南下すると目白、高田馬場あたりに行き当たるので、そうした名称が付いたものだろう。なお、翻案図には「埼玉道」の記載があるが、あまりなじみのない名称だ。江戸時代には使われていなかったと思われる。

北側を東西に延びるのは川越街道、街道沿いに建物が連なっているのは下練馬宿である。川越街道は中山道の平尾追分から分岐して川越に至る道路だが、その間には、上板橋、下練馬、白子、膝折、大和田、大井の宿駅が設けられていた^②。そのなかで、下練馬宿は上宿、中宿、下宿から構成されていた。

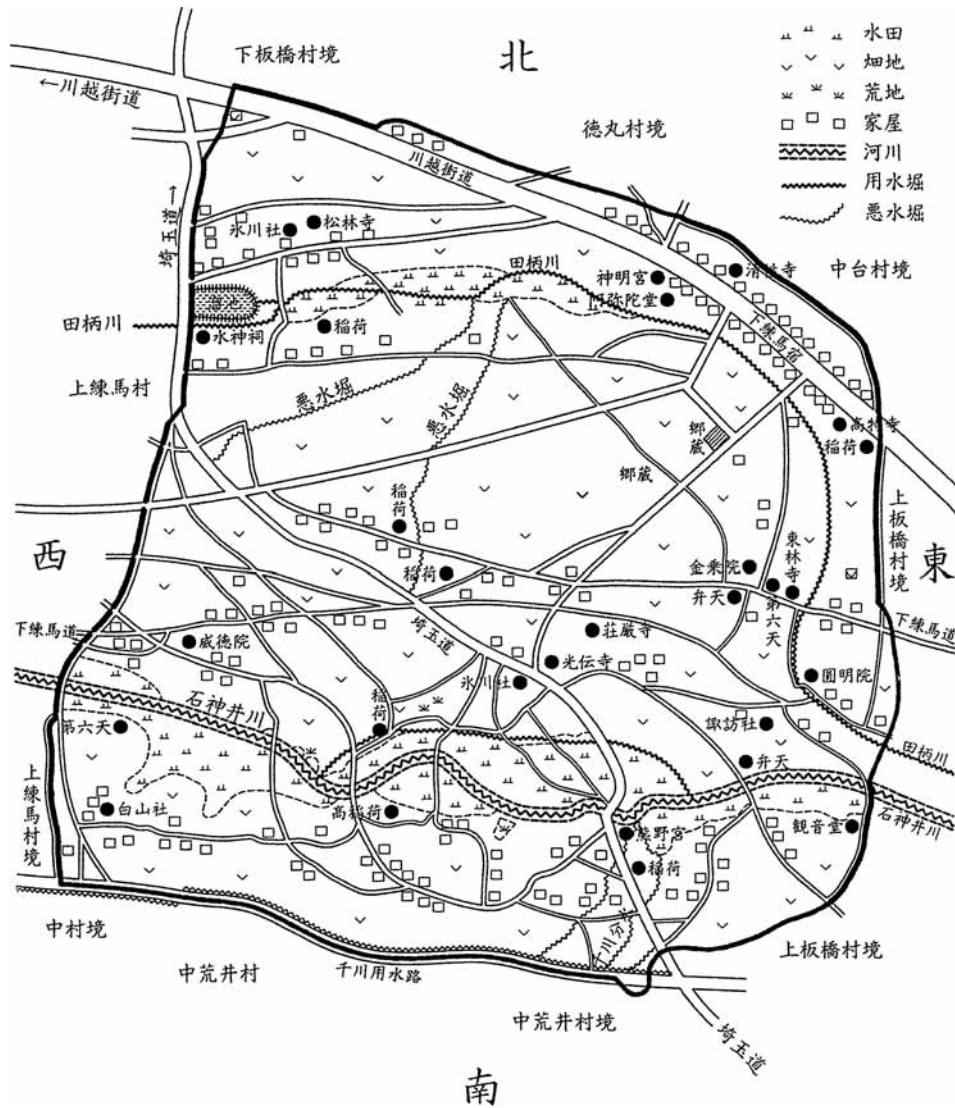
その下練馬宿の手前、板橋寄りから分岐して、南西に延びるのはふじ大山道、あるいは富士街道である。その名の通り、江戸時代には大山（丹沢山系）や富士山への信仰登山のために使われた道路で、川越街道との分岐点にあたる内田家の脇には宝暦3年（1753年）の銘のある道標が建っていたが、近年、環状8号線の工事に伴って移設された。ちなみに、下練馬宿には浅間神社と江戸時代の後期につくられた富士塚もあって、かつての信仰の隆盛を示している。

そして中央を西から東へと流れるのが田柄川である。川沿いに水田がつくられ、原図には小さな水路が何本も描かれている。ただし水田の面積は小さく、大半は畑地である。農家の戸数も限られており、現在の相原家、田中家、木下家などの前身となる農家の所在を確認することができる。これらの田畑を維持するために重要な役割を果たしていたのは、西側にみられるため池の存在だったはずである。現在では住宅が立ち並んで池の痕跡は完全に消えてしまったが、釈敬順『十方庵遊歴雑記』（文化11年（1814年）以降に完成）には「練馬下田柄村の池」という名称でこの池が登場する。その大きさは1町（109メートル）四方だったという。

田柄川の北側に位置するのが氷川神社である。周辺は「大松」の小字名があり、大松の氷川様と呼ばれたりもするが、残念ながらその開基年代は不明である。武蔵国一の宮の氷川神社から勧請されたものと思われるが、同じ下練馬村に属す現・氷川台4丁目の氷川神社との結びつきがあるのかもしれない。

この神社の隣に、松林寺がみえる。この寺は現在、消失している。跡地と思われる場所にはマンション（集合住宅）が建っているが、以前は何もない「原っぱ」で、

連絡先著者：井上孝夫



〔図1〕 下練馬村絵図の翻案図

(出典) 山之内編 (2008)。

子供の格好の遊び場だった。『練馬の寺院』（練馬区教育委員会，1971=2004）にもこの寺の記載はなく，詳しいことはわからない。ただ，錦の金乗院が文久元年（1861年）に火災で堂宇が消失したあと，「末寺の松林寺の本堂を移築し，仮本堂とした」（笹沼・小泉・井田，1984：60頁）とされているので，その後に廃寺になった可能性が高い⁽³⁾。

このように，旧下練馬村の北町，錦の一带は川越街道沿いに町が開け，その背後に農耕地が広がっていたことを確認することができる。田柄川とため池は農業を支える用水として重要な役割を果たしていたわけである。

3. 田柄地区の場合

では，田柄川の上流域，つまり目白通り，あるいは高田道から西側の一帯はどうだったのだろうか。

「下練馬村絵図」に相当する絵地図として安政3年（1856年）に作成された「上練馬村絵図」が残されているが，そこには田柄川の水路の記載がない。〔図2〕は，山之内編（2008）によるその翻案図である。北西の位置

に横に細長い小規模な水田が描かれていて，そこに田柄川が通っていたはずなのだが，水田のなかの小水路だったために描き手の側には河川として認識されていなかったのかもしれない。

おそらく田柄地区の開発にあたって建立されたのが愛宕神社や神明社（現在，天祖神社と改称されている）だったと思われる。いずれの神社も田柄川の北側（左岸）に位置している。愛宕神社は吉田弥五衛が慶長年間（1596-1615年）に山城の愛宕大明神より勧請し，「中田柄郷」の鎮守にしたとされる。周辺の字名は「愛宕原」である。愛宕神は火の神，あるいは火伏の神だが，田柄と火はどのように結びつくのか。確固とした資料はないが，もともと水利の良くない土地であったことを考えると，焼畑農業が行なわれていたことを示しているのかもしれない。あるいは，この地で焼畑が営まれていなかったとしても，焼畑農業を営む一族の祭神として祀られたのかもしれない。

また，神明社は慶長3年（1598年）に上野伝右衛門が伊勢神宮より勧請したのがその始まりとされている。周辺には，「神明ヶ谷戸」，「神明久保」，「神明原」，「北神



[図2] 上練馬村絵図の翻案図

(出典) 山之内編 (2008)。

明]、「前神明」というように、この神社とかかわる字名が数々あるので、神社を中心に村づくりが行なわれていったのだろう。

だが、田柄川の水量は乏しく、農地の開拓には苦労が伴ったようである。吉成勝好は神明社の西北に位置する神明ヶ谷戸の原風景について、次のように描いている。大雨の時は水が谷を流れるが、雨が降らないと水は引き、低地に水たまり（湿地帯）ができてヨシやカヤが繁茂した荒地だった。一帯は「野」、つまり農地には適さない原野だった、と（吉成，1984）。このような事情は別にこの地域に限ったことではなく、武蔵野台地全般にあてはまることである。そうだからこそ、多摩川水系から用水路の開削が行なわれ、それに伴って新田が開発されて、農業生産力が上昇していったのである。

現在、光が丘の秋の陽公園内に田柄川の源流として人工的に水源が復元されているが、田柄川の水源地は実際にはさらに上流があったと考えられている。明治2年（1869年）に作成された「土支田村の絵図」を一つの根拠として、北沢邦彦は「天水を流した自然の水路が、土支田から光が丘一带付近には何流もあり、これらが田柄川を形成する源となったようです」（北沢，1987）と指摘している。とはいえ、この上流域の水量はさらに乏しく、農地の開発には桎梏となっていたと思われるのである。

このような事情から考えると、おそらく田柄という地名は「田枯」あるいは「田涸」に由来するものだろう。そして、その田柄地区を流れる川だから田柄川と名づけられたわけである。

4. 農業形態の変化

江戸時代の農業は稲作に重点が置かれていたわけだが、田柄川流域の農地は水量不足で難点があった。ただ消費地・江戸に近接していることから、元禄期以降になると、稲作以外の商品作物への転換が図られていったようである。

その点について、上練馬村にかかわる資料でみておきたい。

文政4年（1821年）6月の「村方明細書上帳」（長谷川家文書）によると、田は35町8反余、畑は499町4反余で、畑作が圧倒しているのがわかる（練馬区史編さん協議会，1982：1071頁）。畑作の内訳は、前年の「物産書上高組帳」（長谷川家文書）によると、生大根2,500駄、干大根2,750駄、牛房817駄、茄子2,400駄、蕪520駄で、生産代金は1万563貫（1,576両余）となっている（練馬区史編さん協議会，1982：353頁）。商品経済が浸透していたということだろう。

この当時、戸数480に対して、商人34、職人32、医師1、となっているが、江戸末期の慶応3年（1867年）には、商人21、出稼ぎ15、職人34となっている（練馬区史編さん協議会，1982：378頁）。慶応3年時点の戸数は不明だが、2年後の明治2年12月の「明細書上帳」では戸数420となっているので、この間に戸数は60戸減少している（練馬区史編さん協議会，1982：1088頁）。したがって、総戸数に対する非農業従事者の割合が増加していることが確認できる。

これらの点を踏まえて、『練馬区の歴史』（練馬郷土史

研究会編, 1977) は, 商業的農業の発展に伴う農間渡世業者の増大が階層分化を促した, としている。この階層分化の背景には幕府による「増税」が背景にある。年貢負担だけでなく, 助郷役の負担が大きいのしかかったのである。税負担に耐えきれずに, 田畑を担保に借金する農民が増え, 借金が返済できずに潰れ家になる, というパターンもあったと推測できる。ちなみに, 慶応3年時点で, 戸数420に対して, 質屋の兼業者が5軒というのはそういった状況を反映したものであろう。

5. 田柄用水の新設

とはいえ, 農業の基本は稲作なのである。田柄地区の農民は水田を拡大するために, 玉川上水からの分水を幕府に願い出ていたようなのだが, 全く認められなかった。ところが, 幕府から明治政府に変わると, その許可があっさりと降りた。その背景には, 玉川上水水系における上水と用水の分離を徹底する, という政府の管理方針があり, それを前提に用水の不足に対しては新水路の建設を認める, という政策を採ったためだといわれる。

すでに元禄9年(1696年)に玉川上水から田無用水が分流していたのだが, その田無用水から分水して田柄川まで引き込もうとしたのである。用水路の名称は当初, 「田無村ほか8カ村組合用水」としていたが, 「玉川上水新井筋分水」, 「田柄田用水」そして最終的には「田柄用水」となった。ちなみに, 水路新設の嘆願は当初, 田無, 上保谷, 関, 上石神井, 下石神井, 田中, 谷原, 土支田, 上練馬, 下練馬の10村で提出していたが, 途中で谷原村が抜けたために, 「田無村ほか8カ村」という名称が使われたのであった。その際の指導的な位置にいたのが田無村だったことはいうまでもない。

土支田の『小島家文書』によると, 明治4年(1871年)正月に申請し, 同年の10月には村ごとの工事区分分担と工事費用がまとめられ, 「品川県御役所」に報告されている(練馬区教育委員会編, 1993: 479-482頁)⁽⁴⁾。新規開削の用水路は約17.2キロメートル, 各村の分担費用の総額は約1,342両であった。

その流路は現在の西武新宿線の田無駅北口を分水口として北に流れ, 富士街道沿いにすすんで, 石神井から進路を北に向かって田中, 土支田を經由して田柄川と接続した。それとともに, 田柄川の北側に並行して流れる独立した用水路が敷設され, 川越街道の下練馬宿を經由して, 再度田柄川と合流している。この経路設定は, 田柄地区の水田開発に役立てようとする意図とともに, 下練馬宿の飲料水を供給する, という目的があったとみられている。下練馬村が相当の資金を提供していることが根拠の一つである, ともいう(平田, 2004: 2頁)。さらに, 用水の開削や管理という点からみれば, 下練馬宿に千川家の子孫が居住していたことも何らかのかかわりがあったのかもしれない。

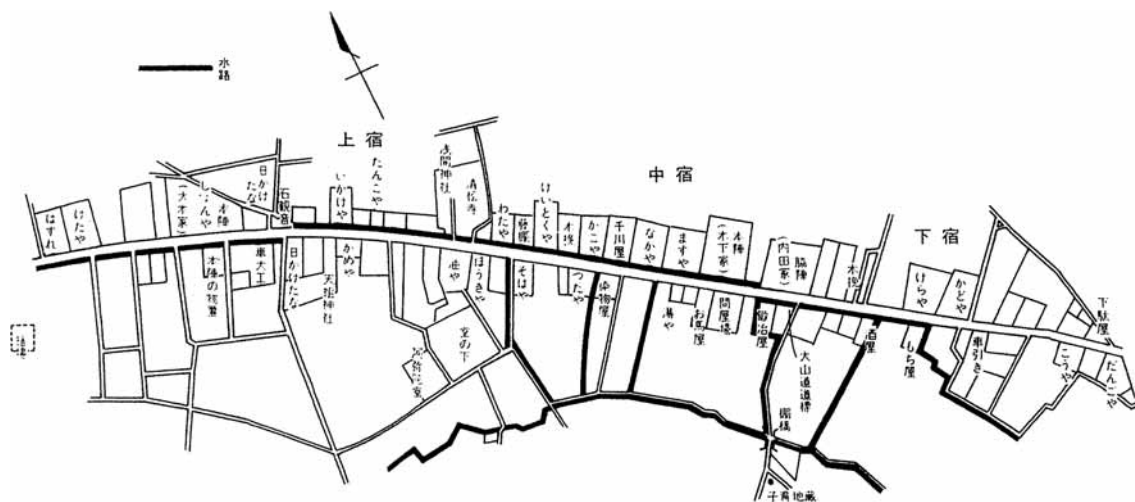
完了までの工期が短いのは, 土支田地区などではかなりの区間で自然の小水路や排水路を利用したためである。天保14年(1843)年作成の「土支田村下組絵図」には, そうした水路が「悪水」(排水路)として記載されている。

ところで, 用水の名称が最終的に田柄用水に落ち着いたのはどうしてなのだろうか。この点について, 吉成(1978)は, ①用水の最終地点が田柄地区だったこと, ②田柄の上野長左衛門が先頭に立って計画を推し進めたこと, そして③田柄地区にもともと悪水堀があり, 自然流水による小河川が多かったこと, といった理由を挙げているが, ①, ②については説得力に乏しいと思われる。おそらく③が有力で, 田柄川に接続する用水として位置づけられたので, 田柄用水の名称が定着したものであろう。

6. 千川家と下練馬宿

[図3]は北町在住の大木正治郎(1925年生まれ)による川越街道・下練馬宿の家並みを描いた地図だが, 太い実線で示された水路を確認することができる。おそらく1930年前後の街の姿だと思われる。この下練馬宿に千川家の子孫が居住し, 上水を管理していたのだった。

[図3]の中宿「千川屋」がその居住地だと考えられる。一般に, 千川の名字を与えられた徳兵衛と太兵衛はも



[図3] 川越街道下練馬宿の復元図

(出典) 笹沼・小泉・井田(1984: 36頁)。

ともと仙川村（現・調布市）に住んでいて、幕府の命により元禄9年（1696年）に千川上水を開削、その際、幕府の用意した資金では足りずに、私財を投じて工事を完成させたといわれている。その功績により、二人は名字帯刀を許され、さらに上水の管理にあたる「千川水路取締役」に就いて、「水使用徴水」の権利を得たというのである。

しかし残された資料によると、上水の開削者は、徳兵衛（播磨屋）、太兵衛（和泉屋）、善九郎（加藤屋）、与市郎（中嶋屋）の4名で、この4名に「千川」の名字を与えられている。4名はあくまでも対等な立場にあったわけだが、善九郎と与市郎は「金主」だったのではないかと推測されている（横山、2006：27頁）。実際のところ、この二人の子孫は千川上水の管理からは手を引いているようで、歴史の表舞台からは姿を消している。そうした事情から、今日、「千川上水は徳兵衛と太兵衛により開削された」とされることが多いのだろう。

それはさておき、下練馬宿に居住したのは千川徳兵衛家の子孫だった。初代・徳兵衛には3人の子供がいて、徳兵衛はそのなかの藤次郎に跡目を継がせようと考えていたが、兄の九右衛門や奉行に阻まれ、千川家2代は九右衛門の次男・長左衛門が引き継ぐことになる（横山、2006：38-39頁）⁶⁾。

千川家が下練馬宿とかかわりをもつのは、その次の代からである。2代・長左衛門の娘「（お）りか」が下練馬宿の漆原源蔵と結婚し、この源蔵が千川家3代になったことによる。源蔵（明和4年＝1767年没）の時代、千川家は上水管理の名目下練馬村に移住し、漆原姓を名乗った（練馬郷土史研究会、1977）といわれるが、正確にいうと、「千川家」は源蔵の生地に移った、ということになる。実際、旧下練馬宿にあたる北町2丁目には漆原家が存続している。また、千川家の子孫は別の場所に移住してしまっただが、近年まで北町に在住していた。千川家の墓所は下練馬村の阿弥陀堂にあり、墓地の奥まった場所に3代源蔵から7代祐（右、と表記）保（明治27年＝1894年没）の墓石が確認できる⁶⁾。ちなみに、千川家累代の墓所の隣は漆原家の墓所である。

この千川家は田柄用水とどのようにかかわっていたのか。用水路が下練馬宿の近辺を通る以上、全く無関係というわけがないと思われるのだが、詳細は不明である。

7. 流量の増大

前述のとおり、明治4年（1871年）に田柄用水は一応、完成した。ところが、田柄の農地まで一定の流量が得られるようになるのは明治7年（1874年）になってからのことだったという。しかしその流量では不足し、農業に影響を与えた。

このような状況に変化が起こったのは20年近くのちのことである。田柄用水は田柄川と合流し、最終的には石神井川と合流するわけだが、音無川、滝野川などと名称を変えた石神井川の下流に製紙工場（王子製紙など）や軍需工場（板橋火薬製造所）などが立地して大量の水を必要とするようになった。明治20年（1887年）、板橋の火薬製造所が水不足となり、これに対して小川村（現・

小平市）の用水を田柄用水に流して増水をはかった。さらに明治26年（1893年）には用水路の拡張や新設工事によって、2回目の増水が実現した。なお、第1回目の増水費用（工事費と示談金（補償金））は2,112円余で、このうちの650円を王子製紙や水車事業者が負担している（練馬区教育委員会編、1993：523頁）。また第2回目の増水費用は2,165円、その4割弱を王子製紙ほかの事業者が負担している（練馬区史編さん協議会、1982：593, 595頁）。これらの事業者はいわばスポンサーの役割を果たし、経済力で田無用水からの分水を増やして、流量を増大させたわけである。

こうして、工業用水の増水にのるかたちで、田柄用水は下流の農地にも行き渡ることになった。そしてその年に、田柄用水の記念碑が建立されたのである。

8. 天祖神社と田柄用水記念碑をめぐって

分水が実現したことを記す記念碑は、現在、移動して天祖神社の境内入口の東側の水神社のなかにある。天祖神社は江戸時代には神明社とっていたのだが、明治に入って、天祖神社と改められた。そして、この神社の前面を東西に田柄用水の水が流れていたはずである。

ところで、天祖神社への改称はいかなる理由からだったのだろうか。ここからは少々余談になる。天祖神社と聞いて、まず思い浮かんだのが奥多摩の天祖山（標高1,723メートル）である。この山は日原の奥にあり、多摩川の源流の一つである。神社改称の背景には、水源の山への信仰があったのかとも思われた。ところが天祖山とは江戸時代までは白岩山などと呼ばれていて、それが天祖山に変わったのは、山中で修行して悟りを開いた服部国光という人物による、というのだ。この人は天学教という新興宗教の教祖となり、多摩地域の農民層に布教するとともに、白岩山の頂上に天祖神社を祀って修行の道場とし、山名も天祖山に改めてしまったのだ。田柄の天祖神社も天学教と無縁とはいえないのかもしれないが、その一方で、神明社の主祭神「天照大神」を天祖と位置づけての改称と考えるのが自然なことなのかもしれない。

ちなみに、この天祖神社の境内には「大口真神」が祀られている。「大口真神」とは「狼」のことで、これは奥多摩の御岳山の信仰とかかわっており、ヤマトタケルを手助けしたとされている。その意味では、天祖神社の氏子たちは田無用水の水が玉川上水を分水したものであり、そのおおもとは多摩川源流にある、という水源への意識を確実にもっていた、ということになるだろう。

それはともかく、田柄用水の完成が明治4年なのに対して、記念碑は明治26年に建立というのは年月が開き過ぎていて、その事情について、用水の増水が田畑の拡大を導いたことによるものではないか、という推測がある（平田、2004）。つまり、用水完成後20年を経過して、農民はその恩恵を実感したということなのだろう。

9. 1930年代の転機——農地整備の逆説

ところが水田耕作はそれほど長くはつづかなかつた。

「練馬区域ではすでに昭和のはじめ頃から市街化を旨とした動きがあった」という。背景には、関東大震災以降、被災者たちが郊外に住居を求めて移住してきたこと、そして鉄道（東武東上線、武蔵野鉄道＝西武池袋線）の沿線に人家が増加し始めたことがある。そこで、「農業より市街地への転換を有利とする考え方のもとに、土地区画整理組合を結成し、耕地の宅地化を進めた」（練馬区、1987：214頁）。「一方で、石神井川や白子川あるいは田柄川沿いの水田を中心に行われた耕地整理や土地改良は、農業の合理化を図ったものではあったが、これも結局その後畑地から宅地へと進むこととなった」（練馬区、1987：215頁）。

ただし、これは公式上の見解というべきかもしれない。「耕地整理」の実情は、北町在住の大木正治郎による次のような「証言」に示されている。

「田柄・北町・錦の地域を流れる田柄川（今は暗渠）の両側には、細長い田んぼが古くからありました。たいした広さではなく、よく水が枯れて、まあ、あまり期待できない田んぼのようでした。

私はまだ子どもでしたが、昭和の初めごろにも干害がありました。そのため、耕作をあきらめて田んぼを手放したり、工場用地に貸したりする家が出ました。そして、こんなことから地主が共同して、一帯の田んぼをつぶし、畑地も合わせて宅地にしようという話になったのです。

ところが、昭和7年になると、練馬が東京市に編入されることになりました（昭和7年10月、練馬全

域は東京市板橋区となる）。そうすると土地の用途の変更は土地区画整理事業としてしか許可されなくなり、道路用地も随分幅広く取られてしまうということが分かりました。

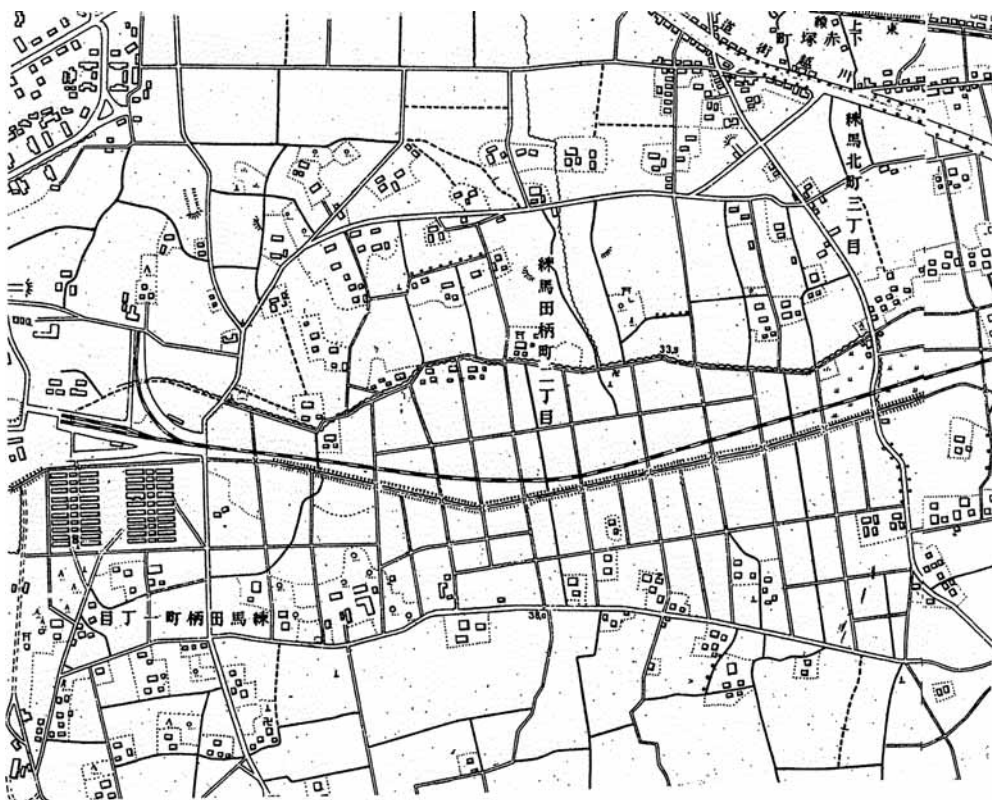
そこで、その前なら、あまり制約のない耕地整理事業として市街地整備ができるだろうという訳で、急いで組合をつくったというのが本音のようです（組合は7年9月、練馬第二耕地整理組合として認可。地域は、現在の北町の大半と錦。当時の宣伝広告の裏に住宅誘致の条件などが載っている）」（北沢、1989）。

つまり、耕地整理というのは名目で、実質は宅地化だったということであり、北豊島郡から東京市になる直前に急遽組合を結成したというのだった⁷⁾。

こうして、東京市への編入の1か月前にあたる1932年9月に組合が認可され、1940年頃まで耕地整理がすすめられた。新川越街道の建設もこの期間に行なわれたものだった。1940年、完成間もない川越街道の北側に土地を借り上げるかたちで陸軍造兵廠の倉庫が建設され、そのうち倉庫は富士街道沿いに増設された。それに伴って、東上線の上板橋駅から引込線が敷設されたのだった。

なお、上流の田柄地区も戦時中から戦後にかけて同様の耕地整理を行なった（亀井、1990）。その結果は、1945年の地形図〔図4〕にくっきりと示されている。

以上の経過を踏まえてみると、山之内編（2008）が明治13年（1880年）の陸測迅速図に基づいて、田柄川流域には「用水路はあっても水量不足で水田がない」ことを



〔図4〕1945年の地形図にみる田柄川流域・田柄地区（部分）

（出典）清水編（1996）。なお、この地形図は戦災復興院の委託によって、日本地形図社が作成したものである。

確認し、その後の地形図との比較検討から、「水田が積極的にあったのは明治25年頃から大正末の30年間だった」としているのは全く妥当な分析だということを確認できる。つまり、田柄用水の増水が実現した年から、大木正治郎という昭和初頭までが水田の時代だったということである。

10. 戦争の爪痕——流路の変更と用水の廃止——

このような経過を考えると、農民を主体とする周辺住民にとって重要なのは田柄用水であり、田柄川ではなかった。それでは、現在緑道化されている田柄川とは一体何だったのだろうか。それは単に、流量の乏しい自然の川とってよいのだろうか。田柄川の変遷史を簡潔にまとめた次の記述を手がかりにしてみよう。

「第二次世界大戦中の昭和18年には、首都防空のため現・光が丘付近に陸軍成増飛行場が建設されました。このとき滑走路を横切る部分にトンネルが掘られ、田柄用水は一部区間が地下に潜りました。ただし、成増飛行場の敷地内には、川が残り、池もあったといわれます。このことから、滑走路そのものは丘を削り谷を埋めて造成したものの、全体としては元々の自然地形を生かしながら工事を行なったのではないかと思います。飛行場から下流は、北側を流れる田柄用水の水路は残されたものの、池端付近まで何本にも分かれていた田柄川の流路が1本にまとめられました。現・光が丘から現・田柄2丁目南交差点付近までは、ほぼ旧流路のうちの1本に沿って川が掘られ、その下流の北町5丁目付近にあった大堰（おおぜき）付近までは、旧流路とは異なるルートに新たに川が掘られました。旧流路は、池端にあった池とともに、新流路を掘った土で埋め立てられました。この掘削工事には、工兵隊があたり囚人が使役されたとも伝えられますが、今回調査で前出の田中氏[北町5丁目在住の旧家—引用者注]にうかがったところ、『1メートル5円で町会が請負い、青年団の私たちが掘った』といえます。当時の5円は、給料水準などから換算すると、現在の感覚では1万円くらい、といったところでしょうか。この工事は、飛行場の排水をよくするためだったと思われまます」(練馬区、刊行年不明)。

寛政4年筆写の「下練馬村絵図」([図1]の原図)を見ると、田柄川の周辺にはわずかに水田が広がっているが、当時は流路も一定していなかったのではないかと思います。明治時代になっても事情は同様で、田柄川は農業用水の幹線としては使えなかったのだろう。そのため、新水路の開削が必要となり、その完成と増水によって、周辺の田畑の開発もすすめられていった。しかし水田に必要な水量の安定的で継続的な確保には困難が伴った。そこで耕地整理を名目にした宅地への転用が図られていったのである。

これに輪をかけたのが太平洋戦争中の陸軍成増飛行場建設である。1942年4月18日の「ドゥーリトル(Doolit-

tle)空襲」によって東京をはじめ本土がB25の爆撃にさらされた。それに対して、軍部は首都防衛のため皇居周辺に高射砲を設置し、さらに独立飛行第47中隊を配置すべく飛行場の建設を計画した。その予定地に選ばれたのが田柄、土支田、高松一帯の農地だった。1943年春に、500名の地権者が集められて陸軍航空本部より説明と協力の要請があり、6月には「8月中の立ち退き」が求められた。移転の条件は、①土地は地価を上回る価格で買い上げる、②農産物に対する補償はしない、③移転費用は現物支給を原則とする、といった内容だった。飛行場建設は急ピッチですすめられ、10月3日には独立飛行第47中隊を飛行第47戦隊に改編して、成増飛行場に配備している(練馬区、1987:188-191頁)。

このようにして農地は軍用地に転用され、用水の必要性も薄れ、ついには水田も壊滅した。さらに、飛行場の雨水の排水のために田柄川排水路を整備することになったのである。その結果、蛇行し幾重にも分かれていた自然河川としての田柄川は一本の流路にまとめられることになった。これが現在、緑道になっている田柄川の元の姿である。

では、田柄用水はどうなったのか、といえば、成増飛行場周辺の爆撃による損壊によって、用水路として機能しなくなって廃止されてしまったのである。

このように、田柄用水が廃止されたのは太平洋戦争が関係している。現在の光が丘地区にあった農地が陸軍の成増飛行場に転用されたことと、米軍の爆撃によって用水路が破壊されてしまったことがその理由である。戦後の比較的早い時期に埋め立てられた用水路は、道路の拡幅に使われたのだと思われる。そしてその道路沿いに住宅が建設されていったのだろう。

いずれにしても、かつて田柄川という自然の川が存在していたが、太平洋戦争後、わたしたちが目にしてきた田柄川は、人為的に一本にまとめられた半人工的な川だったということになる。

11. 暗渠化へ

太平洋戦争後、成増飛行場は米軍に接收され、軍関係者の住宅施設に変わった。南北戦争の北軍の将軍でのち18代大統領になったユリシーズ・グラント(Ulysses Grant)にちなんで、グラントハイツと命名された。施設建設の資材の輸送のために、東武東上線板上板橋駅から枝分かれして陸軍造兵廠倉庫(現在は陸上自衛隊練馬駐屯地になっている)まで伸びていた軌道がグラントハイツまで延長されることになった。北町から田柄にかけては田柄川と旧田柄用水の中間あたりに軌道は敷設された。この路線は敷設工事の責任者である米軍のヒュー・ケーシー(Hugh Casey)中尉の名前をとって、ケーシー(啓志)線と呼ばれ、終着駅は啓志駅とされたが、そこはまさしく自然河川としての田柄川の源流部に近い場所だった。そしてその手前には引込線が引かれ、施設の建設にあたって貨物車両による大量輸送が行なわれた。もちろん、こうした用地を確保するために、農耕地はさらに削られることになったわけである(グラントハイツとケーシー線については、練馬区、1987:256頁)。

田柄川流域における農地の廃止はすでに戦前の段階で条件が整えられていたわけだが、戦争と戦後における米軍の進駐によってそれは決定的なものとなった。そして1950年代には宅地化もすすんだ。こうしたなかで、田柄川は「排水路」としての機能に単純化されていったわけだが、それでも1960年代初頭までは魚を取ったり、川沿いに残された畑からダイコンやニンジンなどを収穫すると川の水で洗ったりする光景もみられた。

だがその一方で、この時期には田柄川の将来を決定する大きな計画がまとめられていった。その背景の一つは、1958年9月の狩野川台風による大雨で川があふれ、流域の住宅が浸水したことである。これを契機に住民からは洪水対策が強く求められることになった。もう一つは、1964年の東京オリンピック開催決定を受けて、都市の近代化に向けての圧力が強まっていったことである。

このような状況のもとで、1961年、東京都市計画河川下水道調査特別委員会の委員長報告が都知事あてに提出された。この報告は昭和36年にちなんで「36答申」呼ばれることになるのだが、そのなかで「下水道幹線に利用する川」の一つに田柄川も入ったのである。その概要を以下、中村・沖（2009）によって、みておきたい。

当時、東京都では下水道の整備が急務であり、また自然河川の扱いとの折り合いをつける必要もあった。委員会ではこうした課題に関して、河川の下水道への転用について、次のような理由を挙げている。

- ①河川を使って自然流下させれば、効率的な下水道ができる。
- ②河川はすでに排水路と化していて、排水を別途、下水道で流せば、河川は水のないゴミ捨て場と化し、衛生状態を悪化させる。
- ③河川を下水道化せずに、下水道を整備することは不経済である。
- ④住民から暗渠化への要望が強くある。

そのうえで、下水道に転用する河川を選定しているのだが、その基準は次のようなものであった。

- ①水源を有さない水路
- ②感潮がない水路またはその区間
- ③舟運がない水路またはその区間
- ④下水処理場に自然流下でアクセスできる水路またはその区間

「36答申」ではこの基準に沿って、桃園川（中野区塔山町、宮下橋より上流）、渋谷川（渋谷駅付近より上流）、北沢川（世田谷区代田1丁目、鎌倉橋より上流）、烏山川（世田谷区若林町、水車橋より上流）、蛇崩川（目黒区上目黒2丁目、大石橋より上流）、立会川（品川区平塚6丁目、旗岡橋より上流）、呑川（目黒区大岡山九品仏川合流点より上流）、九品仏川（呑川合流点より上流）などととも、田柄川の暗渠化を決定した。

こうして田柄川は下水道幹線として転用されることが決定し、1971年からは暗渠化工事が始まって、蓋がかけられ、そのうちは緑道（グリーンベルト）となって、今

日に至っているのである。なお、田柄用水は北町地区では昭和初期に廃止、田柄地区では戦時中から戦後まもなくの頃に廃止、上流の田無寄りでは1965年頃から富士街道沿いの用水路が廃止になり、現在ではほぼ完全に姿を消している。

12. 田柄川および田柄用水変遷史——まとめに代えて

最後に、田柄川と田柄用水の変遷の歴史をまとめて結びにしたい。

田柄用水設置の背景には、天水に依存してきた田柄地区の農民の事情がある。それを打開するために、多摩川水系からの分水の要求があったわけだが、江戸時代には上水の管理が厳しく、農業用水の開削は実現をみなかった。明治時代に入って、政府の水路管理の原則に基づいて、ようやく分水が認められたわけだが、それでも用水は不足し、増水に向けて20年間にわたってさらに運動が続けられた。

明治20年代になると、下流（石神井川）の王子地区一帯に工場が立地し、工業用水の需要が高まった。そこで水利権の調整が行なわれ、分水量を増大させて、工業用水のみならず、農業用水にも一定の便宜が図られるようになった。この時点で、田柄用水の利用は農業用水、工業用水、それに水車を回すための動力源、というように多目的化した。明治時代末から昭和初期にかけての時期こそ、田柄川流域が水田開発で活性化した時期であった。

この状況に変化が訪れるのは昭和初期になってからである。田柄用水は田柄地区の東端にあった「池端」から先の下流部分は廃止された（平田，2004）。用水の水は、池端の池から「目白通り」沿いに南下させて田柄川と合流させたという。昭和初期の大きな変化とは思いますが、その名残はいまではまったくわからない。かつて池があったとされる「池端」はほかの場所と特に変わったところのない住宅地になっているし、用水が廃止された現在の北町8丁目の該当区域も用水廃止に伴う変化はしばらくはなかったと思われる。要するに、畑がそのまま存続したのである。

だが、その後続く太平洋戦争の影響は大きく、農地の軍用地への転用や空襲によって用水路は破壊され、廃止を強いられることになった。自然の水路を一本にまとめるかたちで生まれ変わった田柄川は、実は成増飛行場の排水路となったのであった。そして戦後は、農地の宅地への転用がすすみ、田柄川の水も必要性が薄れ、生活排水を流すどぶ川になってしまった。

現在、田柄用水の果たした大きな足跡を確認することができるのは、田柄地区に限定されるが、田柄川を中心にした南北の一帯に縦横に張りめぐらされた水路の跡をみれば納得がいくはずである。それらの水路は、大半が幅1メートル程度の「水路敷」として暗渠化されている。そこに水を満たすためには到底田柄川の水だけでは足りない。北側に田柄用水があって初めて可能になったのだろう、と実感することができるのである。

だが結局、そのようにして張り巡らされた水路も、宅地化の進展によって、排水路として好都合なものになっ

て、田柄川の水質汚濁を増幅させることになったのは皮肉としかいいようがない。

〈注〉

- (1) この絵図は、練馬区役所文化財係編（2007）、に収録されている。なお、練馬村は江戸時代の初期の段階で、下練馬、上練馬の両村に分離したと考えられている。下練馬村は現在の北町、錦、平和台、氷川台、早宮、羽沢、練馬、栄町に相当し、上練馬村は現在の春日町、向山、貫井、田柄、高松、光が丘、早宮（4丁目）、旭町（1丁目）、土支田（1丁目）、谷原（3、4丁目）に相当する区域である。
- (2) 川越街道の宿駅については、板橋区教育委員会（1971=1981：44頁）の記述による。
- (3) 松林寺は明治維新の際、清性寺、阿弥陀堂、威徳院、高德院、東林寺などとともに本山の金乗院に統合されたというが、1881年の地形図には神社（氷川神社）と並んで寺院記号があり、1909年の地形図で寺院記号は消えている。
- (4) 田柄用水の完成時期は、はっきりしない。『小島家文書』を読む限りでは、明確な記述がないためである。そこで、『練馬区史・歴史編』は明治4年10月の品川県への報告をもって、完成とみなすのが妥当だという解釈を示している（練馬区史編さん協議会、1982：589頁）。それに対して、平田（2004：2頁）や練馬区（刊行年不明：3頁）では同年4月ないし5月とされ、『練馬区小史』には同年初秋に開通した、とある（練馬区、1987：105頁）。なお、刊行された『小島家文書』の解説では、田柄用水は明治6年に「一応完成したようである」としている（練馬区教育委員会編、1993：605頁）が、その論拠ははっきりしない。
- (5) 徳兵衛にとって長左衛門は甥にあたるわけだが、徳兵衛の妻・（お）くらが久右衛門と結婚していたときの子供でもあった。
- (6) 阿弥陀堂の千川家墓誌は、3代源蔵、4代善蔵（天保5年=1834年没）、5代仙輔（天保8年=1837年没）、6代民蔵（天保11年=1840年没）、7代右（祐）保（明治27年=1894年没）、8代菊次郎（大正6年=1917年没）、9代善造（大正14年=1925年没）、10代惣平（昭和19年=1944年没）、11代仙司（平成21年=2009年没）とつづく。それに対して、9代・千川善造作成の「千川善造家系略譜」によると、5代善蔵（天保8年=1837年没）、6代祐保（明治27年=1894年没）、7代善造（本人、千川用水見廻役勤務中）となっている（豊島区立郷土資料館編、1995、131-132頁）。仙輔は善蔵であり、民蔵の名前がないことになる。なお、9代善造が東京府土木課から「千川水路見廻役」に任命されたのは明治23年（1890年）のことだった。
- (7) 東京都の形成史という観点からみて、この昭和初期の時代は重要な意味をもっていた。

「1923年（大正12年）の関東大震災まで東京の市街地の大きさ（市域）は江戸の市街地の大きさ（朱引内）とほぼ同一であった。関東大震災のもたらした結果のひとつは東京の市街地の膨張である。震災後、安全な

地を求めて郊外への市民の避難・移住が始まり、また震災後の増加人口の多くは東京市外の新興住宅地に吸収されたのである。／1932年（昭和7年）10月、人口が急増する東京市外5郡82カ町村が東京市に合併され、東京市の面積は一挙6倍になった。1936年10月に千歳・砧の2村（現在の世田谷区の西部）が合併され、ここに今日の東京の区部に相当する区域が東京市となった（当時は35区からなり、「大東京」と呼ばれた）。したがって昭和初期の東京の都市化、郊外化は今日の東京の都市構造を確立した大きな意味を持つ時代である。／昭和初期の東京の郊外地開発の多くは現地の地主や中小不動産業者が行った小規模な宅地開発であり、スプロールであった。しかし、一部には私鉄資本（東急、東武など）による計画的な宅地開発、地元の有力者による全町・全村を挙げての区画整理（井荻町、玉川村）が実施された地区があり、今日の東京山の手の高級住宅地の多くはこの後者の計画開発によって誕生したものである。したがって東京山の手の市街地が良好か否かを確定したのもこの昭和初期という時代であった」（越澤、1991=2001、132-133頁）。

宅地開発の類型からすると、田柄川流域の開発は明らかに前者であり、この点にその後の状況が規定されていることがわかる。また、この地域の近くでは板橋区常盤台が後者の開発類型の事例とされ、「優美なアーバンデザイン 常盤台」として詳述されている（越澤、1991=2001、133-161頁）。

〈文献〉

- 平凡社地方資料センター編、2002、『東京都の地名』（日本歴史地名大系13）平凡社
- 平田英二、2004、「田柄用水 7つの謎」『ねりまの文化財』59：2-3頁
- 本田創編、2012、『地形を楽しむ 東京暗渠散歩』洋泉社
- 井上孝夫、2012、「街の記憶—練馬区田柄編」『環境社会学研究』19：41-55頁
- 板橋区教育委員会社会教育課、1971=1981、『いたばしの街道めぐり』改訂4版、板橋区教育委員会
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編、1978、『日本地名大辞典13・東京都』角川書店
- 亀井邦彦、1990、「古老が語るねりまのむかし第25回・田柄たんぼと田柄川」『ねりま区報』1990、9、21付
- 北沢邦彦、1987、「ねりまの川—その水系と人々の生活第16回・田柄用水—水田利用の形」『ねりま区報』1987、8、21付
- 北沢邦彦、1989、「古老が語るねりまのむかし第8回・北町の耕地整理」『ねりま区報』1989、3、21付
- 越澤 明、1991=2001、『東京都市計画物語』ちくま学芸文庫
- 中村晋一郎・沖 大幹、2009、「36答申における都市河川廃止までの経緯とその思想」『水工学論文集』53巻：565-570頁
- 練馬区、1987、『練馬区小史』練馬区
- 練馬区、刊行年不明、練馬区公式ホームページ「田柄用

- 水と田柄川の変遷」(2013年6月23日取得, <http://www.city.nerima.tokyo.jp/annai/rekishiwoshiru/rekishibunkazai/rekishitenbyo/tagara/>)。
- 練馬区郷土資料室編, 2000, 『千川上水——昭和27年の写真を中心に』練馬区教育委員会
- 練馬区教育委員会編, 1972=2004, 『練馬の寺院』三訂版, 練馬区教育委員会
- 練馬区教育委員会編, 1973=1998, 『練馬の神社』改訂版, 練馬区教育委員会
- 練馬区教育委員会編, 1987, 『練馬を開いた人々』練馬区教育委員会
- 練馬区教育委員会編, 1993, 『武蔵国土支田村小島家文書』練馬区教育委員会
- 練馬区役所文化財係編, 2007, 『絵図にみる練馬(1)』練馬区教育委員会
- 練馬郷土史研究会, 1977, 『練馬区の歴史』名著出版
- 練馬区史編さん協議会, 1982, 『練馬区史・歴史編』練馬区
- 笹沼正巳・小泉 功・井田 實, 1984, 『川越街道——宿場をいろどる歴史の残照』聚海書房
- 清水靖夫編, 1996, 『明治前期・昭和前期 東京都市地図2 (東京北部)』柏書房
- 豊島区立郷土資料館編, 1995, 『千川上水関係史料集・I』豊島区教育委員会
- 山端 穂, 2006, 「千川上水の開設」大石学監修『千川上水・用水と江戸・武蔵野～管理体制と流域社会～』名著出版: 57-85頁
- 山之内光治編, 2008, 『絵図と地図——練馬村の変遷図集』
- 横山恭子, 2006, 「千川家の概観——江戸から武蔵野へ——」大石学監修『千川上水・用水と江戸・武蔵野～管理体制と流域社会～』名著出版: 21-55頁
- 吉成勝好, 1984, 「地域開発教材としての田柄川」『練馬区小学校教育会研究集録・昭和58年度』= 瓜生左門編, 1997, 『田柄用水をたずねて』練馬区社会科部 (全8頁)

〈付記〉

本稿は「河川環境の保全と利用に関する環境社会学的研究」(科学研究費補助金・基盤研究(C), 2013~2015年度, 課題番号25380654)による研究成果の一部である。